

2015 年国内研修 研修成果報告書

私たちは法政大学ボランティアサークルごまちゃんとして、秋田県藤里町で 3 日間傾聴ボランティアを中心とした活動を行った。以下で特に気づいたことや考えたことを記したいと思う。

・継続してかかわるという意味

私たちは藤里町の若者部会と交流会をさせていただいた。

交流会の中では、「ごまちゃんが藤里町に行き理由」や「藤里町のいいところ、悪いところ」などについて、社協職員、地域おこし協力隊の方と座談会を行った。

まず、ごまちゃんが藤里町に行き続ける理由、としては「藤里にいる方が好きだから」という意見が一番多くあがった。

私も藤里に住んでいる方が優しくて好きだから、と言う理由もあるが、私の中で一番大きな理由は変化を見続けなければ意味がないから、である。一回だけ、福祉の進んでいる地域に行って学んだり、傾聴ボランティアをしても自分達にとっても相手にとってもあまり意味があるものとは思えない。継続して関わっていくことで信頼が生まれ、傾聴もより深いものになっていくと思う。事実、今回の訪問ではじめて出会った方よりも以前の訪問で関わったことがあり、覚えていてくれていた方がより深い話ができたとと思う。私は今回の訪問で 3 回目の訪問になるのだが、3 回とも関わって覚えていてくださった方もいて、その方とは特に深い話もできて、継続しての訪問の成果を実感できた。また、私としても継続しての活動により新たな発見もすることができた。私はこれまでの 2 回の訪問は両方とも冬だったのだが、冬と夏では生活支援ハウス「ぶなっち」の様子が大きく変わっていた。藤里町は豪雪地域なので冬になるともちろん雪が積もる。そのため「ぶなっち」には冬の間、一人暮らしが困難である人が一時的に入居することが多いそうだ。今回の訪問では「ぶなっち」には利用者さんが数名しかおらず、残念さも感じたが東京とは異なって、秋田県などの豪雪地域では生活が季節によって大きく異なってくるという新たな発見ができたのはよかったと思う。反面、残念な出来事もいくつかあった。一つは冬には「ぶなっち」に入居していた男性の利用者さん二人が怪我をしてしまい、「ぶなっち」での生活が困難になってしまい、病院に入院していたということだ。また、もう一つは去年の 1 月に関わらせていただいた利用者さんが亡くなっていたということである。しかし、これらの残念な出来事の中でも、他の利用者さんが亡くなった利用者さんを思った俳句を作っていたり、病院に入院してしまった利用者さんの話を何度もしてくれたり、住民同士の結びつきの強さを感じることができた。「継続して同じまちとかかわることで、悲しい出来事も含め、変化を感じたり、新しい発見をする」という今回の訪問の目的も達成できたと思う。

・藤里と東京の比較

藤里町と東京に関して気が付いたことを比較していきたいと思う。

まず、私が藤里町で気になったのが福祉の拠点「こみっと」の存在である。「こみっと」は食事処にもなっており、引きこもりの方の就労支援を行っており、そこでは元引きこもりの方が社会復帰のために働いている。私たちが食事に行った時、NHKの取材も来ていたほどで、今注目されている施設である。そこではうどんやそば、まいたけキッシュなどを食べることが出来るのだが、味はまあまあおいしいのだが提供速度は遅く、東京でこのような店があっても客は来ないのではないかと考えられる。うどんを四つ注文して、30分以上待たされたこともある。藤里には外食をできるところが「こみっと」を入れて三軒しかないため、このような状態でも店として成り立っているのだと思うが、競争が激しい東京では成り立たないと考えられる。しかし、東京で「こみっと」のようなきめ細やかな引きこもり支援ができるかといえばそれは正直無理だと思う。やはり人口が多だけに、引きこもりなどの社会的弱者は置き去りにになってしまっていることもあるというのが現状だろう。また、引きこもり支援に関しても、藤里は人口が少ない分、「こみっと」で働いている=元引きこもりのようないわゆるスティグマもあるようで、難しい問題だと思う。その点東京で引きこもりの就労支援の施設があったとしても、人口が多いため、また移動できる範囲が広いため、近所の人に見られて、などはあまりないだろうと思う。やはり地域独自のやり方が必要になって来るのだろうと思う。また、なんとなくだが東京の高齢者よりも藤里の高齢者の方が元気なイメージがあったので今回の訪問では何故なのか自分なりに理由を考えてみた。私たちは毎回熟年バレーのサークルの方々との交流をさせていただいている。その方々は運動をしているためもちろん元気だ。このことから藤里の高齢者の方が元気であるといった印象を持ったのだと思う。また、バレーを見ていて気が付いたことがある。女性チームはチームプレイで声を出し合って協力して試合を進めるのに対し、男性チームはほぼ無言で個人プレイ、個人の技術で試合を進めていたように感じる。男性よりも女性の方が寿命、健康寿命が長いとよく聞かすが、このように女性がよくコミュニケーションをとるのに対し、男性はあまりコミュニケーションをとらないということもこれに関わってきているのではないかと考えられる。休憩時間も、私たちとよくお話して下さったのはやはり女性が多く、男性の方は一人で自主練習などをしている方も多く見られた。また、藤里と東京で私が感じた一番大きな違いは利用者さん、住民にとっての「ごまちゃん」の存在である。東京でも月に1.2回ほど、特別養護老人施設やデイサービスに行つて傾聴ボランティアをしているが、正直ごまちゃんを楽しみにして下さる方も中にはいると思うが、そこまでごまちゃんは大きな存在ではないと思う。しかし、藤里ではごまちゃんの訪問をとっても楽しみにしていて、ごまちゃん来るのに備えてお土産を作っていてくれた方やわざわざ予定を空けておいて下さった方もいる。帰るときにはもう時間なのに帰らないでほしいとなかなか手を離してくれ

ない利用者さんもいらっしやった。藤里では若者に会うこと自体がなかなかないようで、私たちの活動は東京での活動以上に成果のあるものとなっているのだろうと感じた。また、ごまちゃんの藤里での活動は10年以上続いているのだが、10数年前、ごまちゃんが宮城先生の紹介で藤里で活動をし始めた頃は今のような関係ではなく、ごまちゃんに懐疑的、受け入れてくれない方もたくさんいらっしやったと聞く。それが10年以上の活動を通じてこれほどまでに受け入れてくれるようになったのも一回一回の活動の成果だと思う。10年以上の積み重ねの重みを考え、今後の活動でも責任感を持ち、活動の重みを考えていきたいと思った。

・心理について考えたこと

現代福祉学部は福祉、地域、心理の三本柱だが、藤里に行くことでその三本柱の繋がりを深く実感できると思う。私は臨床心理学科なので入学当初は福祉や地域にほとんど興味がなかったが、勉強していくにつれそれらが密接に結びついており、切り離せない存在だと認識した。藤里は高齢化率が高い地域なだけあって、やはり「福祉」はとても進んでいる。また、今はまだ大きな地域お越しなどが行われているのは見たことはないが、地域おこし協力隊なども派遣されており、「地域」分野も徐々に発達していくだろう。しかし、藤里をこの三本柱の観点から見ると、「心理」が圧倒的に足りていないように感じた。先に述べた、「こみっと」にいる元引きこもりの中には、ぱっと見ただけでなんらかの精神疾患や発達障害を持っていてそうな方が何人か見られたが、「こみっと」では彼らはいわゆる健常者と同じ扱いを受けているように感じ、社協の方に質問してみると、藤里には心理カウンセラーなどはないそうだ。病院もない町なので考えてみれば当たり前なのかもしれないが、正直とてもびっくりした。「こみっと」のやり方を批判するわけではないが、心理の専門家が藤里にいたらもしかしたらよりよいケアや支援ができているのかもしれない。そもそも引きこもりにならなかった可能性もあるのではないかと考える。このような観点からやはりどんな町でも心理の専門家は必要だと思う。また、藤里だけでなく、地方では心理の専門家がいない地域も珍しくないのかもしれない。確かに、東京などくらべまだ発達していない地方の地域では心理は後回しにされてしまうことが多いかもしれないと思う。一方で、東京ではスクールカウンセラーなどの心理職は余っているという話も聞く。このような地域による格差を少なくしていくことが今後の日本の課題ではないかと考える。私も臨床心理学科らしく、これからも福祉、心理、地域の三本柱をバランスよく地方に取り入れられる方法を考えていきたい。

・おわりに

今回の訪問では宿が藤里から少し離れたところであったため、行きはバスで社協に行った

が帰りは社協の方の車で送ってってもらったりなどと、社協の方にはとてもお世話になった。私たちのようなただの大学生にここまでしてくれるなんて、よく考えてみるととてもすごいことだと思った。社協の方以外にも、宿の管理人の方、交流させていただいた利用者さん、地域住民の方、若者部会の方に大変お世話になった。このような機会に恵まれたことに感謝し、またの機会があったら藤里にできる限りの恩返しをしたいと思う。